

仏教音楽

— 生命いのちの流れとひびき —

渡邊顯信

はじめに

こんにちは、大谷大学の渡邊でございます。只今、ご紹介いただきましたように宗教講座でお話をさせていただくのは、今年で数回目になります。

昨日の新聞に、小学校六年生殺害に関係する事件の記事がありました。それを見ました時に、日本人の心がなぜこんなにも荒廃してしまったのかと驚くと同時に怒りがこみあげてきました。次の瞬間には、悲しみの気持ちへとかわりました。私は、現代日本人の「いのちの実感の希薄

さ」を象徴している事件であると感じました。「いのちの実感」、次の世紀に向けての我々日本人の課題は、まさにこれを取り戻すことであるように思います。今日私がとりあげました「仏教音楽―生命の流れとひびき―」という題も、そのような「いのち」という問題を意識したものであります。お手許に配布願ったレジュメに沿ってお話をすすめさせていただきます。

I はじめに

1 宗教の本質

(1) 「宗教」と「Religion」

最初に、お話の基本となる本質的な言葉の意味と、慣例的な内容を比較してみました。一般に辞書では、「Religion」は「宗教」と訳されています。中学、高校時代の英語の勉強ではこのように覚えますね。けれども、厳密には「宗教≡Religion」ではありません。「宗教」は本来、仏教用語であります。卒塔婆には梵字（シッタタン文字）が書かれているのをご覧になったことがありません。正式には「Siddhanta」という言葉です。意味は「完成されたもの、

仏教音楽

成就されたもの」ということです。「Siddhanta」という言葉を「宗」という文字で翻訳しました。「本義、中心、元になるもの」という意味です。一方レジュメに示した通り「Religion」の語義には二つあります。一つは、「re（再び）+√leg」と解釈して、「拾う、読む、集める、観察する」という意味。それから、「re+√leg」と解釈して、「結ぶ、縛る」という意味。「re」は接頭詞で「再び」という意味ですから、再び結ぶ。では、何を再び結ぶのでしょうか。キリスト教的愛、「創世記」に書いてありますが、アダムとイヴが禁断の実を食べて神の国から追放されましたね。追放された人間を再び神の力、啓示の力で結びつける。それが「Religion」です。神の絶対の力で結び付けるのが「Religion」です。いわゆる、慣例的な分類では「啓示の宗教」というものがこれです。

ところが、仏教の場合は、「Buddha 仏陀」はそういう意味の神ではありません。「目覚めた人」、「真理に気がついた人」という意味です。「自覚された方」、「自覚者」が「仏陀」という意味です。したがって、仏陀の教えは「宗教」ではありませんが、厳密に言いますと「Religion」ではないのです。そして、慣例的分類では、仏教は「目覚めの宗教」といわれま

(2) 「宗教」と「自分の確認」

「目覚めの宗教」においては、「自覚」が重要です。この自覚とは、「縁起の理法」に目覚めるということです。言いかえますと、自分の本質に目覚めるということです。これが仏教の本質です。自分一人で大きくなったと思われる方はいらっしやらないと思いますが、私も若い頃には、親の注意が嫌でよく反発した時代があります。しかし、自分は一人で生きているのではない、一人で大きくなったのではない、生かされていたと気づくことが必ずあります。いろいろな食べ物によっても生かされている。動物、植物など多くの様々ないのちを自分がいただくこととでこの身体が成長し維持できているのですね。だから、他の動植物のいのちをいただくことに対して、勿体ないという言葉が出てくる。ただ今の日本では食糧が豊富すぎますので、残したり粗末してしまうことに、残念ながら感覚が鈍くなっている。この同じ時間に、アフリカで餓死している子どもが何人いるでしょうか。それに気づいた時、自分が今生きていることはそう並大抵のことではなかった。自分が元気で大学に通学していることは、普通のことではなかったのですね。いろいろな願いをもって、ご自分で自発的に光華女子学園を選ばれたのでしようが、いろんな願いに支えられて勉強ができていますね。当たり前と思ひ込んでいること

が、当たり前のようにあるということが、実は、本当に「有り難い」ということ。これを思った時に、「生かされて生きていること」も少しおわかりいただけだと思います。自覚されてくると思います。

自覚されてくる気持ちが出てくる本質を仏教では「仏性」と言います。年をとった私の場合、仏性が身についたかと言われますと、なかなか自分ではわかりませんし、まだまだ至らぬ人間です。けれども、そういう可能性があるということだけは信じ得ます。自分のいのちの確認ということ、これが宗教の本質であると私は考えます。

2 基本的仏教用語の確認

次に、基本的仏教用語の確認をしておきましょう。

- (1) 「縁起：prāṭhya-samutpāda（サンスクリット、以下(S.)と略記）*paṭicca-samuppāda*（パーリ語、以下(P.)と略記）」

縁起でもないなどとよく言いますが、これは間違った使い方です。縁起とは、仏教では事実の在り方をいうのです。善し悪しをいうものではありません。「様々な要素が集まって存在して

いる」という意味です。いろんな縁によってここに今私がある、いろんな要素が集まって今、楽しい。いろんな問題のために自分は今、苦しんでいる、それも縁起です。すべて善悪の問題ではなく、いろんな要素が集まって成り立っていると捉らえるのが縁起という考え方です。「縁起」を悟られたことがゴータマ・ブッダの大切な自覚の一つでした。

(2) 「無常：anitya(S), anicca(P)」

「a」は否定で、「niya」は「常なるもの」、ですから、すべてのものは「常なるものではない」。自分の期待とか意思とか予測に一切関係なしに、うつろいやすく変化しやすいもの、それが「無常」です。幼い子がだんだん成長する。うれしいことです。誕生直後はいささかおかしい顔だなど思っても長ずるに従って人並みになっていく。美しくなるのも「無常」です。年を重ねて皺しわが出て、髪が抜けることも、白髪になることも「無常」です。決して消極的なものだけが「無常」なのではありません。

仏教音楽

(3) 「無明（無知）：avidyā(S), avijjā(P.)」

すべての迷い、苦しみの根源・原因は、真実に暗いこと、無知なことです。これが「無明（無知）」です。

(4) 「真実（諦）：satya(S), sacca(P.)」

オウム真理教で話題になった「サティアン」も同じ語源です。同じ語源ですが、間違っただけの結果が、あのような悲惨な現象を示す言葉になってしまいました。語源は「śas」で英語の Be 動詞にあたります。それに「ya」という分詞がついて「satya」。あるべきもの、あるべき事実、明らかなことという意味です。この事実、すなわち、仏陀の教えに照らし出されて、初めて自分自身の身がはっきりと映し出され、自覚されていくのです。

3 仏教音楽

(1) 釈尊と音楽

光華女子学園発行の「聖典」の中に、釈尊の歴史が編まれています。釈尊は三十五歳から

八十歳までの間、四十五年間布教活動をなさいました。その中で使われた言葉がパーリ語に近い言語だったであろうと言われています。例えば、般若はんにゃという言葉。これはパーリ語で、*panña*といえます。サンスクリットにしますと、*prajña*、智慧という意味です。「*pa-*」は接頭詞で「前に向かって」。「*ñña*」は「認知する」という動詞です。しっかりと物事を知っている。それが智慧という意味です。みなさんは、般若という言葉ですでにパーリ語に接していたということですよ。

(2) 経典記述事例

さて、パーリ語原典の長部経典（『*Ska-paṭha Suttanta* 帝釈所問経』）に、次のような文章があります。

「パンチャシカ（五鬘）が」このように歌い終わったので、世尊はガンッダッパ（音楽神）の子であるパンチャシカに次のように言われた。

「パンチャシカよ、今、汝の「弾いたペールヴァ製の黄色いヴィーナの」絃の音色は汝

仏教音楽

の歌声と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、「汝の」その絃の音色は歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった」。

一人の人間が弾き語りしても、声と楽器がアンバランスな場合があります。それが見事に調和していた。しかもそれはどちらかが優れていたのではなく、どちらも見事にハーモニーしていたと。

漢訳の方では、さらにそれに付け加えまして、「汝の歌い、弾いた音楽は仏様を賛嘆し、美しくしとやかであつて、人々の心を感じさせるひびきがあつた。涅槃の世界、いろんな煩惱がなくなった世界の相をも説いていた」。音楽にそういう力があることを認めていらつしやいます。

それから、お釈迦様の前世の物語にジャータカがあります。その中に、お釈迦様のお母様が懐妊なさった時に天地が振動するなど不思議なことが多々起きたという話もあります。馬は優しげに嘶き、象も優しげに吠えた。すべての楽器は触れられないのに、それぞれの調べを奏でたと書いてあります。弾かないのに奏でる。普通では考えられませんが、実はそれは人間の

考え方であって、音がないと思っっているけど、聞こえない音もある。空気の振動が楽器を自然に鳴らす場合もあります。不思議なことがあった。お釈迦様の誕生はそういうことでした。

(3) 結集^{けつじゅう}（釈尊没後の聖典編纂会議）

ところで、仏教では人々が集まって經典の編纂をすることを、「結集：sanghin」といいます。語根「√gai」は、「歌う、演奏する」。接頭辞「sam」は「一緒に、共に」です。singing together, concert, symphony と英訳されています。例えば symphony の「sym」は「共に」、 「phony」は音です。まさしく Sanghin です。つまり、經典の編纂会議は、称えることが中心だった。称えるのは、誰か力のある人が主になって称え押しつけるのではなく、みんなで聴きあって、ここはああだった、こうだったと確認し合う。まさしくアンサンブルの世界であり、ハーモニーの世界です。

仏教音楽

Ⅱ 仏教音楽…その流れ

1 概説

では、ここで、仏教音楽の歴史を国ごとに通っておきたいと思います。

原始仏教、釈尊の頃の仏教ですが、紀元前六世紀頃のインドは、古来の宗教 *vedic* の時代です。教義は暗記しやすく韻文の形式が中心ですから、当然朗詠調になりますが、現代のような楽譜の形式で記録されたものではありません。

釈尊当時の宗教音楽はバラモンが中心でした。紀元前三世紀のアシールカ王時代から、紀元後二世紀のクシャーナ王朝カニシユカ王時代がインド仏教の最盛期です。それが遺跡で残っていますのが、サーンチー、ガンダーラ、アジャンター、エローラなどの石窟寺院で、その中に楽器を持った菩薩の絵や彫刻や壁画があります。不幸にして九世紀頃に仏教はインドから衰退してしまいました。遺跡以外の文献資料として、マハーバータとかラーマーヤナ等の叙事詩の中に音楽のことも記されております。

スリランカには今でもインドのものが特にテーラヴァーダ（上座部仏教）がそのまま伝承されております。実例としてパーリ語のテキストの中から初めに三帰依文を抽出しておきました。

Buddham saraṇaṃ gacchāmi,

みずから仏に帰依したてまつる

Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi,

みずから法に帰依したてまつる

Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi.

みずから僧に帰依したてまつる

ガッチャーミというのは、「私は行きます」、「行く」という動詞の現在形一人称単数形語尾が「mi」という字で、「gam」。「あなた」がではなく「私は（仏陀（法、僧）を拠り所にして）」生活して行きます」ということです。複数形ではなく一人称単数形であることに、仏教が「自覚の宗教」であることが象徴されていると思います。

二つ目に【法句経 Dhammapada 5】のガーター（偈文）。

Na ni verena verāni sammantidha kudācanaṃ, まじと この世では、怨みによっては

仏教音楽

怨みは決して消える（しずまる）ことはない。

averena ca sammanṭi, esa dhammo sanantano.

怨みより離れてこそ消える、これが永遠の眞実（教法・基本）である。

まさしく仏教の基本姿勢です。もちろん怨みというものは、なかなか消えにくいものです。そうではありませんがそれを超えられる自覚の世界、それが仏教の教えの大切な要素です。みなさんが生まれる前のことですが、一九五一年、第二次世界大戦後の対日講和会議が開催されました。その時、スリランカの代表者「Jayewardene 氏が、スリランカの賠償請求権放棄の演説に、この言葉を引用されました。戦争で痛めつけられ、傷つけられた国の方が、同じ仏陀の精神の下にある日本が今大変な時期にあるということを知られて、ダンマバダの言葉を実践されたのでした。もしできれば記憶していただき、将来、インドやスリランカに行かれる時には、感謝の気持を込めてこの話をなさると、向こうの方に喜んでいただけたらと思います。

タイ・ビルマを含む東南アジアでは、十世紀頃までは盛んだったのですが、十一世紀以降は

イスラム教の力に翻弄されていきます。しかしその遺跡はボロヴドゥール、アンコールワット、アンコールトム等に残されてきました。たとえばカンボジアには、多くの有名な石造彫刻の寺院、王宮の跡があります。アンコールという言葉は、王の都という意味で、ワットはお寺という意味です。アンコールワットよりも少し北の方にアンコールトムという王宮の跡があります。仏教が政治の中心になっていました。それがカンボジアの特徴であります。

その次にチベット、中央アジア。中央アジアには三世紀頃、ガンダーラ経由で、トルキスタン、パミール高原、カラコルム、タミール盆地、ウイグルを経て伝わってきます。仏教の最盛期には、クチャを中心に大きな影響を与えています。仏教美術も同様で、ガンダーラ系美術、彫刻も含めて、トカラ系のもも多数残されています。洞窟の中ではジャータカ物語等を主題とした、絵画、壁画が残っており、壁画の中には楽器を持つている飛天、天女の絵なども見られます。

中国に行きますと、前漢の時代に仏教が入り、当時流行していた儒教、道教と拮抗しながら広がっていきます。南北朝、隋、唐の時代になりますと、国家的なバックアップを得て儀式も盛んになり、儀式を伴う音楽も確立されます。唐時代の中国は、世界の中で一番文化の進んだ

仏教音楽

国家であったようで、音楽の文化国家という方が適切かもしれません。それぞれの国に固有の音楽がありましたから、お互いに関係し合い、仏教音楽が伝承されて行ったのであります。

2 声 明

漢字文化圏を通して伝えられた日本では、「声明：sabda-vidyā」という形で展開していきます。「sabda」が「言葉」という意味で、「vidyā」が「明」です。音を明らかにするわけですから、文法でもあり、音韻学、音声学でもあります。レジュメに書いた五つある学問体系の基本になります。これが日本では音楽として展開していきますが、当初、特に第九回の遣唐使の帰国と共にインドの Bodhisena 菩提僊那やベトナム僧の仏哲が来られました。奈良東大寺の大仏開眼法要を勤める時、当時の日本には中心になれるお坊さんがいませんでした。そこで菩提僊那が導師になりました。インドの方ですから、サンスクリットの歌、梵唄が正式に使用されました。これ以降、日本でも儀式執行上で音楽が大切な要素になって行きます。

たまたま去年、東大寺から新資料発見のニュースが公表されました。その資料は「盧舎那仏

開眼供養供奉僧名帳」(卷子本十五巻)で、その中に開眼法要に参加した人たち一万八百二十五名の名前が書いてあったそうです。それまでは「続日本記」に記されたおおよその数しかわかりませんでした。

平安以降になりますと、「梵唄」から「声明」という言葉に変わってきます。日本的な表現と言えましょう。学問的に分類しますと、「本声明」、「雑声明」の形になります。

3 近・現代のあゆみ

日本の世界との交渉は明治から始まったと言っても過言ではありません。それまでは鎖国政策でしたから、ほとんど交流はなく、したがって仏教音楽の現代的開始も明治からです。仏教音楽の創草期、キリスト教にあった日曜学校制度を模倣しまして、日曜学校の制度が取り入れられました。そこで歌います仏教唱歌、仏教童謡が沢山作られました。一八七九(明治十二年)、文部省音楽取調掛が公的に設置され、洋楽をとり入れた音楽教育が開始されました。一方私的には、一九〇二(明治三十五年)年、仏教音楽会が東京浅草九品寺内に創設されています。大正になりますと、仏教音楽の成長期に入ります。名称も、「仏教唱歌」から「仏教讃歌」

仏教音楽

に広まってまいります。この時代は、大正デモクラシーという言葉がありましたように、その時代の文化が特徴づけられました。「赤い鳥」や「金の船」という雑誌が創刊された時代です。「赤い鳥」は唱歌タイプの詩を紹介し、「金の船」は童歌タイプのものを集め紹介しています。唱歌タイプの作曲者として山田耕筰、成田為三、弘田龍太郎等の方々、童歌タイプは中山晋平、本居長世等が著名でした。

一九一八（大正七）年、「恩徳讃」が澤康雄の作品で発表され、一九二三（大正十二）年、「真宗宗歌」が真宗立教開宗七百年の記念で作られています。

昭和になりますと、仏教音楽の時代と言われる程の発展をしています。一九二八（昭和三）年、文部省宗教局の中に仏教音楽協会が創設されました。個人レヴェルではない文部省の中です。意外なことですね。そういうことが必要だということが認められてきたのですね。理事や評議員の中に著名な文学者や詩人が入っています。幸田露畔や北原白秋、野口雨情、作曲家の中には、「ふるさと」の作曲者岡野貞一、山田耕筰、弘田龍太郎、本居長世が加わっています。その他に仏教界や研究者の人々、財界の有力者達も入っています。仏教音楽協会第一回創作発表会が一九二九（昭和四）年四月に開催されました。一九三三（昭和八）年には、仏教音

楽協会京都支部、京都仏教聖歌研究会が結成され、第五回の創作発表が、京都女子専門学校（今の京都女子大学）で開催されています。その後第二次世界大戦の始まる前年の一九四〇（昭和十五）年の第十一回まで続きました。もうすでに戦争が始まる機運が感じられ出だした頃に、仏教讃歌がどんどん作られ発表されている。このエネルギーは見事だと思います。

一九四五（昭和二十）年八月十五日、日本は正反対の生き方をしなければならぬという苛酷な転換に立たされました。それまで日本は戦争に敗れるということとはなかった。日清戦争、日露戦争を通し、「神国」とか「神風」の名のもとで傲慢になっていたものであります。それが一九四五年八月十五日をもって、初めて根底から覆されたわけです。そのような混乱期の昭和二十二年三月、当時の東本願寺のご門主ご夫妻がいち早く、大谷楽苑を設立されました。奥様の大谷智子さんは皆さんの学校の総裁に就任された方です。そのご夫妻で大谷楽苑を作られた。讃仰歌を公募して、一九四八（昭和二十三）年六月五日、十曲の発表をしています。その第一曲目が「みほとけは」という名作です。大谷楽苑設立と同じ年の冬、大谷派内の音楽関係者有志で日本宗教音楽協会が創立されました。その目的は伝統の宗教音楽を生かしつつ、現代音楽と四つに組んで、日本の音楽界に新しい行き方を開拓しようということでした。翌一九四八

仏教音楽

（昭和二十三）年四月、日本宗教音楽演奏会として京都と大阪で演奏会がなされています。京都の場合は五月三日、東本願寺の大師堂前の広場でやろうと。ところが、その日、突然、雨になりましたので、急遽、本堂の中に入りました。本堂は世界一大きな木造建築です。その中で初めてコーラスとオーケストラによる演奏がなされました。本堂の中でそれまで一切なかったことですが、すばらしく効果があつたようであります。予想外の音響効果を皆さん方が感じられたようです。専門家の方々にも大きな驚きを与えた。仏教音楽の進むべき新たな道が、これで見つかったと大きな反響を与えた演奏会であつたようです。

その一年後には、朝比奈隆さん（現在では世界でも最長老の指揮者です）の指揮により京都の松竹座で同じ演奏会が開かれました。その後、皆さん方の先輩の光華女子専門学校の学生も一緒になつた京都学生仏教音楽研究会が発足しました。その後、大谷派合唱連盟ができたり、西本願寺の方では仏教音楽研究所ができています。

これまでに発表された作品は、かなりの量に及びます。少しご紹介しましょう。一九五六（昭和三十一）年、南方仏教二千五百年記念、お釈迦様が亡くなられて二千五百年という数え方です。その時、「交声曲（カンタータ）仏陀」という作品が発表されています。その二年後

に、黛敏郎さんが「涅槃交響曲」を発表して絶賛されました。

仏弟子関係のものや親鸞関係のもの、また来年、蓮如上人の五百回忌を迎えますが、一九四九（昭和二十四）年蓮如上人四百五十回忌の時に「交声曲蓮如」が発表されています。

仏教音楽出版物として、二年前に「仏教音楽辞典」が出版されています。一度手に取って見て下さい。過去の歴史、現在の歴史を含め詳細に説明されています。若干修正しなければならぬ部分もありますが、大きな仕事です。

ところで、さきほど学長先生のお部屋でお話を伺っていました。私たちの時代には楽器がほとんどなく、ピアノを持っている家は百軒のうち一軒あればいい方でしたが、電子オルガン等も含めると、今ではかなり高いパーセントで持っておられますね。しかし、残念ながら、それを楽しむ風潮が少なくなっている。楽器産業が拡大した分だけ、複数の人間が集まって一つの目標を目指し、合奏などやろうという思いがだんだん少なくなりました。物量が増えて人心が減ってきた。そんな風潮になりつつあります。

この傾向には次のような原因があると思います。人類は、産業革命以来二十世紀にかけて科学技術を最優先目的にして、突っ走ってきました。その結果人間の内面性・精神の問題がおろ

仏教音楽

そかになり、あるいは軽んぜられてきました。

ところが二十世紀末の現在、その結果はどうでしょうか。コンピュータを駆使なさる方が多いでしょう。インターネットを活用なさる方も少くない。パソコンゲームを楽しんでおられる方も多いでしょう。小さいお子さんの場合、パソコンゲームはできるけれども、同じ仲間同士で外で工夫して遊ぶことが少なくなつたそうですね。機械とは対話できるけど人間とは対話できない人が増えてきているそうですね。人間とはそんなものじゃなかった。別な言い方をすればある面では機械の弊害ですね。本当は機械は人間が活用して初めてその関係が成り立つものなのに、今は機械に翻弄されているようですね。

機械文明に懸命であつた我々は、二十一世紀を迎えるにあたって、何か考えなければならぬのじゃないでしょうか。幸いなことに、光華女子学園は精神文化を大事になさっています。どうぞ、そちらの方へ目をもう少し振り向けて下さい。そうすれば機械を利用することはあつても、機械に利用されることは決してないでしょう。そのことをぜひお願いしたいと思います。

Ⅲ 仏教音楽…そのひびき（テープ演奏）

「心から心へー生命いのちの流れー」

ここで、実際に仏教音楽を聴いていただき、また、ご一緒に歌っていただきたいと思います。

時間の関係で三曲だけに割愛させていただきました。一曲目は、「いのち」という歌です。

（以下、合唱）

いのち

藪田義雄 作詞

下總皖一 作曲

一、野の花の小さな いのちにも

仏はやどる 仏はやどる

朝影と ともに来て

つつましい 営みを与える

仏教音楽

おなじように

二、野の鳥の 幼いのちにも

仏はやどる 仏はやどる

涼風と ともに来て

生きる身の 喜びをささやく

おなじように

三、白露の 儂いのちにも

仏はやどる 仏はやどる

月魂と ともに来て

ひと夜さの やすらぎを教える

おなじように

次の二曲は大学事務局からの御依頼による選曲です。

光華女子学園の歌

大谷智子 作詞

信時 潔 作曲

一、祖徳も高き 比叡山

遙に望む まなびやに

朝まだきより つどいつつ

仏の前に ぬかづかん

二、流れも清き 桂川

川瀬のなみに すむ月は

しろがね黄金 かがやきて

遠き浄土を しのばする

恩徳讃 I

親鸞聖人和讃

清水 脩作曲

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨をくだきても謝すべし

御協力いただきありがとうございました。

Ⅳ む す び — 仏教音楽 その目的 —

仏教音楽

最後に仏教音楽の目的をお話して終わりにします。仏教とは、釈尊（自覚者）の教えでした。そして、音楽とは、単なる音や騒音とか雑音じゃなくて、本当のひびき、心にしみるひびきを楽しみ、願ひあう世界。楽しみという字には願うという意味があります。「音」というのは心

のひびきあう世界。真実がひびきわたっている世界のことです。「楽」の字は心からの喜びの世界、楽しみの世界です。同時に当然その世界を願うという心の働きです。それがなければ楽しいということはありません。ですから「音楽」は本当のひびきを感じあう、それを楽しんでない方に伝えたいと願うことも「音楽」だと思っています。音楽はどんなジャンルであれ、本質はそれはずです。仏教音楽、真実のいのちのひびき、心の交流方法を学びながら、楽しみ、願う世界、それを求めていくもの、求めていく媒体になるものが仏教音楽であると思っています。そういう働きもあると思います。

心から心へ伝わる世界、それが音楽の世界です。真実のひびきの言葉をいくつか用意しました。ベートーベンは五十七歳で亡くなりましたが、晩年の作品「莊嚴ミサ曲」の最初「キリエ」の標題の上に彼が書きなぐった言葉があります。

【Von Herzen - Möge es wieder - zu Herzen gehen.】

（心からーそして再びー心へと伝わらんことを）。

仏教音楽

ベートーベンの場合には、作曲とは神の心が自分の心に伝わり、その働きを楽譜に書くという活動です。しかも「荘厳ミサ曲」作曲当時は全くの難聴です。耳が聞こえない。聞こえない人間がどれだけ精神的に落ち込むか。彼がその思いを振り切れたのは神の心を自分の心に感じ得た時だったのでしょうか。作曲した以上、その心をぜひ演奏者の心へという願いがあつたのでしょうか。そして演奏者の心から聴衆の心へと彼の願いが発展したのでしょう。そのために、それを願って書いたのだと思います。

「お浄土は音楽の世界ですよ」

これは、金子大榮先生のお言葉です。お浄土はキリスト教でいえば天国でしょうか。その世界には、皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんなど先立たれた方がいらっしやるのです。この地上にはおられないけれども、別の世界に居られるのです。それが仏様の世界でありお浄土なのです。そのお浄土の世界から皆さんを見まもって下さっておられます。ただ我々が気がつかないだけ。私の前からも後ろからも横からも、そういう縁ある方々が私たちを見守ってくれてい

る。そういう方々が居られる世界が音楽の世界ですよと金子先生はおっしゃって下さいました。私がこれをうかがったのが大学一回生の時です。その時は言葉の深さや意味がよくわかりませんでした。数十年経った現在、私は声楽で落ちこぼれの自分が指揮者というアンサンブルの一要員として、コーラスに参加できハーモニの世界を実感させて戴いて来られたことを有り難く思っております。私のような落ちこぼれのものも救われる世界が、この言葉の内容であったと、現在、実感させて戴けるようになりました。

「本当のものがわからないと、本当でないものを本当にする。」

これは安田理深先生のお言葉です。よくあることですね。自分が知らないだけなのに、自分が誤解していただけなのに、どれだけ自分が苦しみ、人を苦しめたか。皆さんの中でもそれぞれの人生の中でこのような経験をなさった方もおありでしょう。

【美しき色 あれど 香のなき花のごと いのちなき言の葉 いとさみしかり】

仏教音楽

（某師）

美辞麗句はいらないのです。立て板に水式の話はいらないのです。ほしいのは訥弁でもいい、「いのちのある言葉、いのちのあるひびき」。嘘いつわりのない「心からのひびき」ではないでしょうか。

最後に、相田みつをさんの詩を紹介して終わります。

つまづいたおかげで・・・

相田みつを

つまづいたり ころんだりしたおかげで 物事を深く考えるようになりました
あやまちや失敗を くり返したおかげで 少しずつだが 人のやることを

暖かい眼で 見られるようになりました

何回も追いつめられたおかげで 人間としての 自分の弱さと だらしなさを

いやというほど 知りました

騙されたり 裏切られたりしたおかげで 馬鹿正直で 親切な人間の暖かさも
知りました

そして…… 身近な人の死に逢うたびに 人のいのちの はかなさと

いま ここに 生きていることの尊さを 骨身にしみて味わいました

人の いのちの尊さを 骨身にしみて 味わったおかげで

人の いのちを ほんとうに大切にす る ほんものの人間に

裸で逢うことが できました

一人の ほんものの人間に めぐり逢えたおかげで それが縁となり

次々に 沢山のよい人たちに めぐり逢うことが できました

だから わたしの まわりにいる人たちは みんな よい人ばかりなんです

仏教音楽

人をいい人と見られるのはすばらしいことです。私はなかなかそれができません。しかし、その世界が大切だということはよくわかります。私はあと何年生きられるかわかりませんが、いのち終わるまで、せめてそれを求めて歩みたいと思います。そして若いあなた方は、二十一世紀には、次の世代のいのちを育むわけです。それがお一人であるか、お二人であるか人数はわかりませんが、お子様を育まれるわけです。ぜひ、大切な親たちからいただいたそのいのち、願いを次の世代にバトンタッチしてあげて下さい。それをお願いしまして、皆様のことからのさらなる勉強と健康と、よき人生が開かれますことを念じながら私のお話を終えたいと思います。どうも長時間、ご静聴ありがとうございました。

——一九九七・五・二八——